

子どもの本

研究会



35周年

子どもにおはなしを
本のたのしみを!

私の一冊

『アルジャーノンに花束を』

ダニエル・キイス 著 / 小尾美佐 訳 (早川書房)

(早川書房)

川村博子



この春から念願の「学生」となって、大学院で障害心理学を学んでいる。この本は、心理査定の授業で、担当教官から示された一冊である。じつを言うと、課題のあまりの多さに皆で軽減を求めたがあえなく却下、重い気持ちで読み始めた、という曰く付きであった。知的障害で幼児の知能しかないチャーリーは、研究として行われた脳手術により、ハイレベルな知能を手に入れる。頭を良くして自分のことをもっと好きになってもらいたい、周りの人と色々な話をしてみたい、と懸命に努力するチャーリーだが、彼の思いとは裏腹に周囲の反応は冷たい。やがて誰よりもはるかに賢くなってしまったチャーリーに、本人も周囲の人々も戸惑い苦悩する。だが、先に同じ手術を受けた白ネズミのアルジャーノンの知能が退行しはじめ、チャーリーは、自分のたどる運命を悟る…。

知能はもとに戻ってしまうのだが、チャーリーは、もとの彼とは明らかに違っている。自分の運命を理解したうえで、それでも彼は少しでも「りこう」になるために、本を読み続けようと決心するのだ。たとえそれがどんな現実であろうと、真実を知ることが、現実に向かう勇氣を人に与える。そこから、人はまた必ず前に向かって歩き始めるのだ。

チャーリーが「愛情を与えたり受け入れたりする能力がなければ、知能というものは精神的道徳的な崩壊をもたらし、神経症ないしは精神病すらひきおこす」と述べる場面がある。これは30年程前の作品だが、この科学技術が発達し過ぎた感のある現代、まさに知能偏重が子ども達の様々な精神不安を引き起こしている。他人を思いやる、共感するという人間であることの証明ともいえる心理、それが育ちにくくなっているとすれば、なんと危機的なことだろう。私たちは、人間として存在するために本気で知恵を出しあわなければならぬ時代を、これから生きていくのだ。ここ最近、以前ほど本に集中できないという寂しい状態が続いていたので、この本との出会いはとても有難かった。おぼちゃん学生、与えられたものにはつべこべ言わずに素直に従うべし、と反省した。

(特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 会報員)